

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>聴覚障がいのある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、自立と社会参加に向けて豊かな心とたくましく生きる力を育てる。</p>	<p>今年度の 重点目標</p>	<p>1 確かな基礎学力の定着を図るための学習指導の充実(学力向上) 2 自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実(たくましく生きる力の育成) 3 心身の健康と豊かな自己表現力の育成(心身の育成) 4 生徒に対する指導の充実を図るための更なる学校業務改善の推進</p>
---------------------------	--	----------------------	---

年 度 当 初				評 価 結 果 (2)月				
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策	
確かな基礎学力の定着を図るための学習指導の充実(学力向上)	(幼) (1) 体験的な活動を通して様々な事象に興味や関心が持てるよう環境や機会を設定する。	(1) きこえにくさにより情報量が少なかったりや経験が不足したりするため、興味や関心が広がりにくい傾向にある。	(1) 身近な事象に積極的にかかわり、気づいたり、考えたり、予想したり、工夫したりする。	(1) 個々の幼児の実態を把握し興味や関心が持てるような活動を設定する。 (1) 幼児の思考を促し思考を深めるように、5W1Hを意識した声かけをする。 (1) 具体物や絵、写真などを補助的に使い、内容の理解を促す。	(1) 疑問詞を使ったやりとりを継続するとともに活動が発展するように環境を工夫することで、幼児が互いに活動の中で気づいたことを伝え合う姿が増えた。	B	(1) 個々の幼児に合った環境設定と活動内容の精選をする。	
	(小) (1) 基礎学力が向上するよう、学びを深める発問の工夫を取り入れた授業づくりに努める。	(1) 実態把握や個々の実態に適した支援の検討により学力が定着しつつあるが、文章を読もうとしたり、読んで内容を深く読み取ったり、正しく質問に答えたりすること等に課題がある。	(1) 主発問を的確に行い、反応を予想して補助的・発展的発問を工夫する等の支援を取り入れた授業づくりをすることによって、児童が主体的に深く学ぼうとするようになる。	(1) 的確な実態把握ができるよう、実態に合った検査を実施したり、つまずきの記録から支援を検討する事例研究会を行う。また、一人1授業研究会や授業研究会を行い、発問や正しく答えるための支援を工夫する。	(1) 一人1授業や学部授業研究会を実施する中で補助発問のとらえ方を学部内で明確にし共通理解することができた。「どんな～」「どのように～」の問いに関してどのような補助発問が効果的であるか具体例を出し合った。また、個々の児童の変容について学部内で話し合いを行った。発問に対して児童が自分の考えを答えられることが増えたが、語彙数の獲得はまだ不十分である。	(1) 一人1授業や学部授業研究会を実施する中で補助発問のとらえ方を学部内で明確にし共通理解することができた。「どんな～」「どのように～」の問いに関してどのような補助発問が効果的であるか具体例を出し合った。また、個々の児童の変容について学部内で話し合いを行った。発問に対して児童が自分の考えを答えられることが増えたが、語彙数の獲得はまだ不十分である。	B	(1) 個々の授業で感じた課題について学部内で共有し具体的な支援方法について検討することを継続していく。語彙に関する学習時間を確保し、生活全般でことばの意味を押さえていく。
	(中) (1) 目標を持ち、知識や技能を身につけようと意欲的に学習する態度の育成に努める。 (2) 実態把握に基づく支援方法の共通理解と考える力を育成するための支援の工夫に努める。	(1・2) 学習状況が様々であり、個に応じた丁寧な指導をすることが必要である。苦手な教科にも積極的に取り組むようになり、学力も少しずつ向上している。	(1) 生徒が自ら目標を決めることができる。 (1) 知識や技能を身につけようと学習や活動に取り組むことができる。 (1・2) 授業の中で、自分の考えを説明できる。	(1) 自分で決めた目標について、到達点が視覚的にわかり、達成感を味わえるよう支援する。 (1) 生徒自身が自分の考えを説明できるような雰囲気づくりや発問の仕方の工夫をする。 (2) 諸検査等の共通理解や行動観察等を通して生徒の実態把握を行い、支援方法の共通理解を図る。	(1) 授業研究会や学部研、学部会を通して授業力向上や共通理解を図り、生徒は授業の中で自分の考えを説明できる力が付いた。 (2) 諸検査や懇談の記録等を回覧し、生徒についての情報交換を通して生徒への理解を深め、支援方法の共通理解を図るよう努めた。	(1) 今後は他者を認めたり受け入れたり関わり合ったりしながら、会話を楽しむことができるような思考力や表現力を育みたい。	B	
(高) (1) 進路と日々の学習を意識づける指導と進路希望に応じた教科指導の充実を図る。	(1) 進路を意識し意欲をもって学習に取り組み始めた生徒、家庭学習の提出や学習時間の確保に課題のある生徒、学習したことの定着に課題がある生徒など実態は様々である。日々の授業を活用しながら、指導方法を工夫し、生徒の実態に応じて主体的に学習に取り組む姿勢を培う必要がある。	(1) 基礎学力や思考力が向上し、自ら学ぶ方法を身に付け継続して学習できるようになる。	(1) 個々の生徒のつまずきや特性に応じた課題を共通理解する場面を学部会やケース会議、学部研究会などで設定し、課題に応じた指導や支援を行う。 (1) 生徒の基礎学力や思考力を高めるために、授業における発問の方法などの指導方法について研究を進める。	(1) 学部研究会で、思考力・表現力を高めるために個々の生徒に応じた指導や支援方法の工夫について検討した。生徒の得意な活動を生かし、イメージを視覚化することで学力の定着を図った。また、5W1Hを意識した発問をして思考を結びつけ課題解決をする授業を設定した。	(1) 引き続き個々に応じた指導や支援を行いながら学部の連携や学校全体を通じた一貫性のある教育を目指し研究を進める。	B		
自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実(卒業後を見据えた生きる力の育成)	(支) (1) 乳幼児教育相談で保護者に子どものかかわり方について支援するよう努める。 (2) 通級指導で難聴への理解を深め自己認識を高めるような指導や支援に努める。 (3) 個々のニーズに合わせた支援や情報提供に努める。 (4) 聴覚障がいへの理解が深まるよう啓発に努める。	(1) 子どもへの接し方に支援の必要な親子があり、伝わりやすい話しかけについての意識を高める必要がある。 (2) きこえについての課題意識がとぼしく、改善に向けて行動を起こしにくい児童生徒が多い。 (3) 支援会議等で本人・保護者・担任との間に考え方や意識の違いが見られ、ニーズの把握が難しい場合がある。 (4) 医療との学習会で情報共有をしたり、研修会の講師として福祉や教育との連携を図っている。 (4) 聴覚障がい教育に初めて関わる地域の学校の課題意識が少ない。	(1) 保護者が子どもの気持ちに寄り添いながらかかわるようになる。 (2) 場面に応じて学んだことを活かし問題解決しようとする。 (3) 難聴や発音に関する研修を行い様々なニーズに対応できるようにする。 (4) 関係機関と連携し、県内の聴覚障がい児に関する情報交換をし、よりよい支援に努める。	(1) 担当者がかかわり方のモデルを示したり視覚的な提示を行ったりするなど支援方法を具体的に示す。 (2) 通級指導の連絡帳を通じて担任や保護者と情報を共有し、児童生徒の課題に対して共通の認識を持ち、連携して支援できるようにする。 (3) 難聴児にかかわる関係者に対し校内研修会への参加を募ったり情報交換の場を提供したりして、難聴への理解を促す情報発信をする。 (4) きこえやことばに関する保護者資料を作成し配布したり教育相談や通級指導の紹介DVDを作成したりして啓発活動を行う。 (4) 理解啓発のために、どのような活動ができるのか一覧表を作成し関係機関に配布する。	(1) 活動の見通しがもちやすいように活動の写真カードを提示することで、親子で自発的に遊ぶ姿が見られるようになった。また、共通の手話カードを作成し、実態に応じて学校、家庭、在籍校(園)と連携しながら使用した。 (2) より児童生徒の実態に応じた指導ができるように、通級担当者同士で指導法や教材を共有し相談した。児童生徒に改善や成長がみられることが多かった。 (3) 研修会の案内を新年度になる前に送付した。担当者に渡っていない可能性があったため、研修会参加者が少なかった。 (4) 活動紹介DVDが完成し、学校祭で発表した。また、学校視察や研究会の時にも視聴し、活動を紹介した。 (4) 中部地区の連絡会等に参加するようになり、連携が広がった。活動一覧表は作成したが、理解啓発を図るためにどこに配布するか検討中であり配布はしていない。	B	(1) 研修会等で勉強した情報や知識を相談活動に活かしていくためにも、他校の実践を参観するなどして専門性を高めていきたい。 (2) 個々の児童生徒の実態や指導状況について、共通理解が進みにくいこともあったので、担任と電話連絡をしたり支援会議がより共通理解の場となるように情報提供を行ったりしていく。 (3) 研修会や教育相談の案内は年度末に出すのではなく、新年度になってから届くようにする。 (4) 活動紹介DVDについて、計画的に活用できるように考えていく。 (4) 活動一覧表の配布を保育所だけではなく、理解啓発を図るために社会福祉協議会や公民館、またHPなどを使って知ってもらおうようにしたい。	
	(幼) (1) 同年齢の大勢の幼児や様々な人とかかわる場を設定し、かかわり方を支援する。	(1) 大きな集団の中で活動する経験が少なく、友達と一緒に遊んだり話しかけたりしたい気持ちはあるが、伝わりにくい経験から消極的になる傾向が強い。 (1) 周りの人の様子を見て、補聴機器の有無に気づき始めた幼児がいる。	(1) 誰にでも進んで挨拶をしたり、自分から質問したり、話しかけようとしたりする。	(1) 自分の思いが相手に伝わる経験を増やすため、教師が幼児同士の仲立ちをする。 (1) 地域の方との交流や居住地の保育園での交流を実施する。 (1) 自分の聞こえにくさに気づき、補聴機器を大切に扱うことができるよう支援する。	(1) 会話の中で伝わりにくいと感じた時に幼児が自ら意思表示をし確実に伝え合おうとするようになった。 (1) 地域の方との交流は他の行事との兼ね合いでできなかったが、居住地の保育園での交流は予定通り実施できた。 (1) 補聴器機の取扱いについて継続指導を行っている。	(1) 幼児が互いにわかり合いたいという気持ちを育てよう支援を続ける。 (1) 交流については幼児の実態や他の行事との時期等を考え、その都度検討する必要がある。	B	

		年 度 当 初			評 価 結 果 (2)月	
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	改善方策
	(小) (1) 基本的な生活習慣の定着を図り、社会参加にむけて望ましい習慣や態度を育てる。	(1) 少しずつルールを守ろうとする姿が見られるようになってきているが、基本的な生活習慣、学校生活のきまり等について自ら判断して守ろうとするには課題が残り、指導が必要である。また、校外の社会におけるルールなどは未経験であることが多い。	(1) 学校内外の社会においてきまりやルールを自ら守ろうとすることができる。	(1) 地域の人々となつながら経験を通して、どう行動したらよいか考え実行できる場面を設定する。また、場面をとらえて主体的に適切な行動ができるよう声かけを行う。	(1) 校外学習の際にはルールを守り最後まできまりよく行動することができた。校内では、時間が経つと忘れてしまったり子どもたち同士で注意することをためらう場面も見られた。個人の実態もあるが、ルールとして守る意識を指導していく必要がある。	(1) 意図的にマナーやルールを守らなければならない場面を設定し、自ら考え行動できるような経験を積み上げていく。学部内で共通理解を図りながら全体指導や個別指導を組み合わせしていく。
	(中) (1) 自分の障がい等を理解し、自己肯定感を持ちながら自分の課題を克服しようとする態度の育成に努める。 (2) 学校生活や社会生活をよりよく送るためのソーシャルスキルの向上を図る。	(1・2) 自分の障がい等についての理解が十分に進んでいない。自己肯定感が十分にはぐくまれておらず、自発的に行動するのが難しい生徒が多い。	(1) 自己理解が進むとともに、自分なりの課題解決方法がわかり、それを実践しようとしている。 (2) 相手や場に応じた受け答えができる。	(1) 自分の障がいを理解し、自分の良さや課題を知る学習を行う。 (1) 課題解決方法を教師と一緒に考え、実践する。 (2) 宿泊体験学習や職場見学・交流学习等の校外学習等を通して社会生活に必要なマナーやルールについて学び、日常生活の中でも意識して取り組むようにする。	(1) 弁論大会を通じて障がいを含めて自分自身のことを振り返り、思っていることを素直な言葉で表現することができた。本番では練習の成果を発揮し、堂々と発表することができた。 (1) 自分ががんばってきたことや友達の良いところを伝え合う学習をし、自分の良さを改めて確認する機会を持った。 (2) 他校との交流では、相手校の生徒の立場に立って、交流内容を考えようとする姿が見られた。	(1) 引き続き、自己評価だけでなく、他者評価も取り入れていく。
	(高) (1) 自立と社会参加をめざし、あるゆる活動を通して、主体的に考え行動できる力を培うための指導の充実を図る。	(1) 高等部卒業後の進路については未定の生徒が多く、職場や大学等の見学、現場体験学習等を通して卒業後の進路決定を意識づけていく必要がある。 卒業後を意識した行動が身につけていない生徒が多く、自立や社会参加に向けてさらに自ら考え行動する生活習慣の確立を目指す必要がある。	(1) 将来の社会生活を意識し、規律(時間・言葉づかい等)を守り、自ら考えながら学校生活を送る。 (1) 社会自立のための自己の課題を知り、主体的に解決しようとする。	(1) 生徒が課題意識をもって生活できるように、生徒の課題について全教職員が共通認識した上で、指導を徹底する。 (1) 諸検査や日々の情報交換をもとに生徒の実態を把握し、生徒一人一人の進路実現を目指した授業を設定する。 (1) 現場体験学習や職場見学、大学見学などを実施し、進路を意識づけるとともに、社会参加に向けて必要な力について考える機会を設定する。	(1) 日々の生活の中で見られる生徒の課題について適宜共通理解し日々の指導を行った。 (1) 定期テストや模擬試験の結果を見て教員同士で情報交換をし、実態を把握し、日々の学習へつなげるように努めた。 (1) 現場体験学習や職場見学等をきっかけとし、自分の課題や目標について考え、日々の生活の中で振り返る機会を設けた。	(1) 日常の情報交換や卒業後を意識した指導を継続する。 (1) 進路決定に向けての学習を計画的に行う。
	(幼) (1) 感じたことや考えたことを相手に伝えたり表現したりする力を育てる。	(1) 自分の気持ちを伝えるための表現方法が未熟で教師の支援を必要とする。	(1) 幼児がそれぞれ自分なりの方法で相手に思いを伝える。	(1) 言葉による正しい表現方法の定着を図るため、幼児の思いを押し量り拡充模倣を促す。 (1) 相手の話を注意して聞いたり相手にわかるように話したりするよう、話し合い活動の機会を適宜設ける。	(1) 幼児の表出を絵や文字で視覚的に確認できるようにすることで正しい言葉や文の定着が進み、相手に伝わりやすくなり、表出が活発になった。	(1) 絵日記指導を継続する。 (1) 音声とともに手話やキューサインを付けることを習慣化する。
	(小) (1) 友だちとの活動を通して自分の思いや考えを伝え、相手の話を理解できる力を育てる。	(1) 自分の考えを友だちや先生に主体的に伝えようとする場面が増えている。自分の思いを周りの人に伝えようとする気持ちはあるが、言葉を正しく使って表現することが未習得である部分がある。また、友だちの話を最後まで顔を見ながら聞いて理解したり、答えたりすることはまだ難しい。	(1) 学校内外の社会で、相手に自分の経験や考えを正しく伝えようとする。相手の話を最後まで聞き、内容を理解し、自分の考えを伝えようとする。	(1) 地域の人々との交流の場では、相手の顔を最後まで見て話を聞く、はっきりと相手に自分の思いを伝える等のルールを事前に確認する。また、学級活動や児童会活動等の集団での時間において、友だちや先生と伝え合う活動を設定し、個別の支援を工夫して行う。	(1) 合同学活や児童会等で話し合いの機会を設定した。その結果、休憩時間や生活のあらゆる場所で子ども同士で自分の意見を伝え話し合いをする場面が見られるようになった。その際には相手に伝わるように声の大きさや手話を工夫していた。話し合いがまとまらない時の解決方法が難しい現状がある。	(1) 話し合いの回数を少しずつ増やしていく。個別の支援を工夫しながら定着を図りたい。
心身の健康と豊かな自己表現力の育成(心身の育成)	(中) (1) 弁論大会・体験報告会・交流活動等を通して、話す意欲と表現力の向上を図る。	(1) 自分の思いを相手に伝えることについて苦手意識のある生徒が多い。 (1) 周りの状況を把握して行動することに課題がある生徒が多い。	(1) 自分の思いを相手に伝えようとしている。 (1) 相手の立場を考えた言動ができるようになる。	(1) 自分の思いの伝え方について特設自立活動(アサーション等)等で学習する機会を持つとともに日々の生活の中で指導する。 (1) 自らの行動を客観視できる機会を持ち、どのように改善すべきかを考える場面を設ける。	(1) 弁論大会等、人前で自分の思いを伝える機会を積み重ねることで伝え方を考え、堂々と発表できるようになってきた。 (1) 学習中は建前で意見を言うことはできるが、生活の中では自分の思いを伝えるばかりで相手の立場を考えた言動ができるまでには至っていない。	(1) 学習や日々の生活の中で自らの言動を振り返るよう、引き続き指導していく。
	(高) (1) 言語力・表現力・コミュニケーション力の向上を図る学習活動の充実に取り組む。	(1) ほとんどの生徒のコミュニケーション手段は手話、指文字、身振り等であり、指示だけでなく実際に体験し確認をすることが必要な生徒もいる。 人と関わることを好む生徒が多いが、適切かつ積極的なコミュニケーションには課題も多い。	(1) 交流や現場体験学習等で相手や場に応じて、積極的かつ適切にコミュニケーションを取ろうとする力が向上してきている。 (1) 自立活動をはじめ、弁論大会やステージ発表を通して、自己表現力が向上している。	(1) 相手や場に応じた適切なコミュニケーションが取れるように、事前に具体的な場面を想定して練習を積み、実際の場面で活かすようにする。 (1) 自立活動などの時間を活用し、状況に応じた日本語の使い方や意味の学習を積み重ねることを通して、一人一人の日本語力を伸ばす。 (1) 岩美高等学校、八頭高等学校、鳥取大学の学生との交流、手話パフォーマンス甲子園や学校祭ステージ発表に向けての学習、弁論大会などを設定し、自己表現力を高められるようにする。	(1) 岩美高校との交流で学校紹介、ゲームの進行を担当する中で「伝え合う」ことを積極的に行い、生徒のコミュニケーションを取ろうとする力が向上してきている。 (1) 弁論大会に向けて、自分の体験したことをもとに訴えたいことをわかりやすく伝えるための文章表現を工夫できるように指導した。 (1) 現場体験学習で見られたコミュニケーションにおける個々の課題を認識し日々の指導に生かすようにした。	(1) 交流や手話パフォーマンス甲子園参加や弁論大会など言語力・表現力・コミュニケーション力の向上を図る学習活動を継続する。

評価基準 A: 十分達成(100%) B: 概ね達成(80%) C: 変化の兆し(60%) D: まだ不十分(40%) E: 目標・方策の見直し(30%以下)